

## 進路指導

岩井 紀子

## 複雑に変容する子ども関係

進路指導部会として、常に研究取材の中心に次の2点をおいてきた。

- ①子どもの変容をどうつかむか
- ②教員がどうなっているのか―教育に向ける目がどうなっているか

### 子どもの変容をどうつかむか

部会交流で次のような報告があった。小学六年生の良くと達くんは友だち同士です。その二人と「はじめ」について討論をする機会がありました。良くんは悠くんという子にいつも罵声を浴びせられ、うつむいて生活をしている。達くんは自分にとぼつちりがこない形で良くんへのはじめがとめられないか悩んでいます。はじめについて話し合いました。

### ●「討論会で発した良くんの言葉」

自分はそれほどいやなことをされていない／ひどいことを言われてもまあしうがなかな？／いやなことは記憶から消すようにしている

と言います。

### ●罵声を浴びせる子とまわりの子の意識

一方、罵声をあびせる側の悠は時として、「良と友だちだと思っ人手を挙げて」と唐突に周りの子に言いふらすことがあります。おぼろげに手を挙げた子に「じゃあ友だちやめるわ」と言い放ち、良をおとしめる形をとる悠。その言葉を聞いた子は「ええ、なんで」というだけで否定も肯定もしない。どちらに対しても中途半端な態度を示すだけ。またさらに、数日後に悠は、「なんで」と言った子に対して「友だちよろしく」と気を引くように言っって回る姿勢をとる。

ここから見えてくることは、「悠は良が気に入らない。みんなもそれを知っている。自分には関係ないことだから、悠に対して批判もしないし、二人の気持ちに寄せることもない。子どもたちは、発した言葉やとられた態度の意味を考えることなく、その場その場の空気の中で浮

遊し、言った言葉やとった態度を感じることなく日々を送っているのではないか。一方、悠からはじめのはけ口のような言葉を浴びせられる良自身も、いやなことをいやと直視することもなく、無意識の守りとして、「記憶から消すようにしている」と発しているのではないか。その中で達くんが心を痛めている。

### 教員の教育に向ける目

気分が乗ったときには「友だち」という言葉に反応し、反対に前のことはなかったかのような態度をとる子ども。どの子も、ともに生活している実感や自分の確信などもたらされていない。

今、子ども同士の関係・距離がどうなっているか。どういう意味をもって言葉を発しているのか。私たち教員はつかめているのだろうか。そして、どれだけ子どもをまるごとつかもうとする姿勢があるか。子どもの発した言葉の意味、とった態度の意味を読みとる力があるかが問われている。

私たちの子どもをとらえる足場をどこにおいて子どもをとらえるか、丁寧に考えていく必要がある。(小金井・緑中)